

二反長半作品集

2

二反長半作品集



2

少年小説

集英社

二反長半作品集 第二卷 「少年小説」

昭和五十四年七月五日 第一刷発行

著 者 二 反 長 半

発行者 堀 内 末 男

印 刷 大文堂印刷株式会社
株式会社美松堂印刷所

製 本 株式会社石橋製本工場

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十

郵便番号一〇一

販売部 東京二三八局二七八一番

出版部 東京二三〇局六三五一番

著作権継承者の了解により検印廃止いたします。

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません。

凡 例

▽本作品集は、童話を一卷、少年小説を一卷、民話を一卷にまとめ、全三巻とした。

▽本作品集の編集にあたっては、著者の意志を尊重し、底本は初筆原稿作品を採らず、可及的に著者が新しく更訂を加えた単行本より採用した。

▽本作品集掲載の作品選定にあたっては、編集委員会において決定した。

▽作品発表後の著者による加筆、削除、訂正、文字調整などは、つとめてこれを活かした。

《童話について》

▽配列は初出誌紙不明の場合が多いため、単行本として最初に発表された年代順に並べた。なお同時期刊行の作品については、五十音順に配列した。

▽旧かな、旧漢字は、現代かなづかい、新漢字に改めた。また原則として、分かち書きを廃止した。

▽改題作品は、底本通りのタイトルとし、文末に旧題を示した。

《少年小説について》

▽配列は、単行本として最初に発表された年代順に並べた。

▽用字用語については、童話作品に準じた。

▽改題作品は、底本通りのタイトルとし、文末に旧題を示した。

《民話について》

▽配列は、北海道から沖縄まで、地域順に収録した。

▽出典に関しては、巻末に一覧表を付した。

▽用字用語については、童話作品に準じた。

▽原話者のある作品は、原話者名を文末に示した。

第二卷目次

凡例

一

乳山の歌声

七

赤おにやしき

101

あすなろの星

113

解説

編集委員会
二五

編集委員

石森延男

久保 喬

土家由岐雄

表 丁

舟橋菊男

二反長半作品集

第二卷

乳山の歌声

空の雲か峯の桜か

1

春になって、風は、東から羽毛のようにやわらかくか
けてきた。野から学校の窓をぬけて、丘のだんだん畑の
麦の芽の上を、乳山にのぼる。

空の雲か、峯の桜か

乳山の峯、青空にとけるきわ

われらの学び舎

日の光、きょうもかげろい

風の音、きょうもさわやか

窓をぬけると、オルガンの音とともに、生徒たちの
歌声をそっとぬすんできた。菜種の花や、木の芽の匂い
をこんもりと包んで――。

子供たちは、この風を吸って育ち、この花をながめて
育った。

耕平と圭治はさっきからみどりの丘で、じつと樹の幹
にもたれていたが、ふり仰ぐと陽炎の中にヒバリが二羽、
ピーチチ、ピーチチと斜めの線をえがいていた。

「太陽の粉みたいだ」

耕平が言うと、

「ほんとだ、金の粉みたいにきらきらしている」

圭治もそう言って、空を見上げた。小さばきする羽ば
たきは、ほんとに金の粉を散りまいたみたいに見える。

眼の中、光いっぱいになってまばゆく、二人は眼を細
めた。すると、みているうちに一羽がつーと落ちてきた。
そして、

ビビビビビビビ

と、はや囀りして、絵をつくっているだんだん畑の麦
の芽の中に消えた。

ふたりは、それとかけ出した。

ヒバリは、けっして自分の巣のそばへは降らない。十
メートルも二十メートルもはなれたところに降りてから
巣にかえる。耕平も圭治もそれを知っていた。それで、
およその見当をつけて、麦の根方をしらべた。

麦は、黒い土の中から力強くのび、葉や茎を通して、

こぼれる陽の光がしずかであった。

一メートル、二メートル、

耕平はその巢一つを求めてはらばった。と、

「あった、あった」

耕平は、こんもりとかたまつた土のかげに、枯草をあつめた、かわいい一つの巢を見つけたのだ。

親ヒバリのそばに、まだ生まれたばかりの子ヒバリが五羽、黄色い^{くもはし}嘴を大きく開いている。

耕平は、気づかれないように身をかがめた。もう考えている余裕などなかった。帽子をわしづかみにすると、唾液をぐっとのみ込み、パッと巢の上にかむせた。と、

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

とたん、ヒバリはつぶてのようにとびたち、巢は嵐となつて立ちさわいだ。

「圭治君」

そこではじめて耕平が、帽子の中に子ヒバリの動くのを感じながら、声をたてると、

「とれたかい」

圭治が、麦の葉の間から、赤い顔をあらわしてかけてきた。

「こどもばかりとれたに」

「親ヒバリは」

「逃がした」

空には、羽をバタバタさせて、親ヒバリが麦畑の上で舞い、ときどき耕平たちの頭の近くまできては、また上がった。圭治が土を空にまくと、土はあたらないでバラバラと音をたてて、時雨のように麦畑におちてきた。

2

この山一帯を、人びとは乳山といっている。地図には竜王山^{りゅうおうざん}とあるが、北にそびえるその峯が、おかあさんのお乳そっくりなのだ。

海拔八百メートル。学校はちょうど、中腹のだんだん畑の東に、桜林でこんもりとかこまれていて、麓^{ふもと}には佐保川が、少女のたすきのように、銀色に光っていた。

耕平の家は、この佐保川をうけてビワの木がしげっている。

田畑を二つ三つはさんで、圭治の家や甚太の家などもかたまっていた。どの家もみんな畑をつくったり、山の薪をきったりしていた。が、ただキクノの家だけが豆腐

をつくっていた。この五、六軒の家の群を、村の中でも、またビワの木屋敷という。耕平の家に大きなビワの木がしげっているからだ。

だんだん畑からは、その屋敷もよく見えた。ちょうど佐保川橋を銀色の竜王バスが渡っていた。橋詰が停留所になっているので、ちょっととまって、また、玩具みたいに町の方に下りて行く。

耕平も圭治も、ひょうひょうと春風を鳴らしながら、だんだん畑をむちゅうでかけおりた。

「餌をやって大きく育てようね」

耕平が三羽、帽子につつみ、圭治が二羽、ふところに入れていた。

「餌はミミズがいいぜ」

「じゃ、裏のビワの樹の下にうんといらあ」

耕平はおとうさんと魚釣りに行くとき、よくビワの木の下からミミズを掘った。

そのうちにも、子ヒバリが帽子の中で動くのが、掌まで伝わってこそばゆかった。ときどきのぞいてみると、頭を空にむけてビイビイとないている。

耕平には、千太郎という弟がある。いつもヒバリの子、

ヒバリの子とねだっているのです、この子ヒバリをみてどんなによろこぶだろうと思った。

「千太郎、ヒバリの子とってきたぞ」

耕平は家にかけてつけると、もうビワの木の下から大きく声をかけた。

今にも千太郎は、赤い顔をしてとび出してくるだろう。耕平は、千太郎の顔がみえるようだった。ところが、

「にいちゃん」

裏木戸から出てきた千太郎は、運動帽をかむっていたが、元気がない。

「とうちゃんがいないんだい」

「どこへいった」

耕平が言うと、

「町へいったんだい」

「そんならずぐ帰ってくるけに——、ほら、ヒバリ、ほら、ヒバリの子だ。かわいいだろう、千太郎にも一つやる」

耕平は、帽子の中から一羽とり出した。

けれども、千太郎は少しもよろこばない。

「千太郎、どうしたんだ」

耕平がいうと、

「だって、とうちゃん、帰って来ないんだもん」

ヒバリの子を耕平に押しかえて、

「とうちゃん、お巡りさんそこへ行ったんだもん」

火のつくように泣き出した。

「警察かい」

警察といって、耕平はどきっとした。

圭治もまた、きゆうに身がさむくなった。彼も今は、

ヒバリどころではなかった。二羽の子ヒバリをふところ

から、耕平の帽子の中へ押しこむと、

「さよなら」

ぱっとかけ出した。ばたばたする自分の足音が、巡査

のサーベルの音のようにきこえる。

「なあに、おとうさん、すぐお帰りになりますだに」

ばあやが、おろおろして出てきた。

乳山の子

1

耕平のおかあさんは、千太郎を生みおとすとすぐなくなった。だから耕平のまふたには、おかあさんのやさしい顔よりも、甘いお乳の姿がはつきりしている。それで耕平は、乳山をみると、おかあさんを思い出す。

しかも、朝もやや夕もやの中では、その姿はよりいっそうその思いをつよめる。

幼いとき、耕平はよく乳山に向かってさげんだ。

けれども、いくらよんだとて、おかあさんが帰るはずはない。だんだんおかあさんが帰ってこないことがわかれると、耕平には、こんどはその乳山が、おかあさんに見えてきた。

「おかあさん」

耕平は、両手をさしのべて、おかあさんに抱かれようとした。あかつきの光が、乳山にあたるときなど、おかあさんの姿はほんとうに息づいてみえる。

また、ときどき耕平は、おかあさんの夢をみる。そんなときも、やはり視界いっぱいひろがってくるのは、甘いお乳である。

あるとき、そのお乳から、こんこんと乳がわき出て来た。耕平はどんなによこんだことだろう。

「おかあさん」

ぱっとびついて、そのやわらかいお乳をきゅっとしぼった。甘い滴がとろとろと舌をぬらし、舌の上からのどをとおって、身体ぜんたいにしみこんで行く。すると、「耕平、大きくなっておくれよ。そしてりっぱな子供になつてね」

おかあさんの声が、耳もとでささやいた。

「はい」

耕平は元氣よく答える。が、とたん、そのお乳は、耕平の口からはなれて、はるか彼方へ遠のいて行く。

「おかあさん」

耕平は力いっぱいさけんだ。けれどもその甘いお乳は、ゆるやかな曲線をつくって、もやの向こうにのび去り、みるみるその曲線は、はつきりと乳山の姿にかえって行った。

晩に映える、金色に彩られた、とうとい乳山のすがた――。

耕平は、まだ舌の上に、甘い乳を感じながら、限りない母の愛をその中にみる。こうしておかあさんは、ビワの木の家からはいなくなったけれども、乳山の自然の中に美しい姿を横たえていた。

「自分は乳山の子だ」

耕平は、いつのまにか、そう思いこむようになっていた。

だから、自分の力でどうにもならないとき、耕平は乳山にのぼって、おかあさんをお願いする。

2

耕平には、もうおかあさんにすぎるより外なかった。おとうさん、耕平、千太郎、ばあや、それだけのビワの木の家の家族の中から、おとうさんが警察へ行ったのだもの。

五羽の子ヒバリを、帽子のままふところになると、耕平はひとりで乳山にのぼって行った。ビワの木の下から学校のわきを通して、だんだん畑のあぜをぬって丘の上

に出た。そこには赤い池があって、水に藻がういていた。小さな池だったが、こんな山腹にありながら、水がこんこんと湧き出ていた。が、それ以上に不思議なことは、この水がどんな冬にも凍らないことである。

それで、昔から人びとは、赤河童がときどき浮かび出ては村の子供をさらって行くとも言う。

『赤河童の池』といっているのも、このためだ。

けれども、耕平は少しもこわくなかった。

赤河童にさらわれて、池の底に沈んでしまえば――。

耕平は、赤池の底をいろいろと想像した。すると、何かしら楽しかった。藻の根がからんでいて、赤河童の御殿があって、その御殿には、美しいお姫様がいて、アケビの実や貝の肉や、いろいろな御馳走があって――。が、そこまで思って、耕平ははっとした。

ぶくぶくとあがったあぶくの中から、ひょっこりと蛙が頭を出したのだ。赤い泥をかむって、皮まで赤くなっている。ああ、そうだ。これが赤河童の子供かもしれない。そして、この赤河童の子供こそ、乳山のおかあさんのお使いではないだろうか。耕平は、池のふちの木に付かまっ、ぐっと上体を池の上へつき出して言った。

「のう、河童、おまえはきっと、この赤池の底の有様を知っているだろう。知っているなら、僕におしえておくれ。僕のおかあさんを、お前は知っているだろう」

耕平は、じっと赤河童をのぞき込んだ。

しかし、子河童は、藻に前足をかけたまま、眼をきよときよとさせていた。それは耕平の、命をかけての願いをきいているより、うらうらと晴れた、春の空をながめわたし、やがて、わが世の初夏が、ここにも訪れる日の近づいたのを、よろこんでいるみたいである。

でも、耕平はつづけた。

「のう、子河童、お前がもし、おかあさんのお使いであるなら、ビワの木に、おとうさんがお帰りになるように、お願いしてくれないか。僕のおとうさんが、警察に行かれるような悪いおとうさんか、それを一番よく知っているのは、おかあさんなのだ。おかあさんさえ、おとうさんをまもってくだされれば、おとうさんはいまにもきつとお帰りになる。そうすればまた僕たちは、ビワの木の下で、おとうさんと千太郎といっしょに楽しく暮らせるのだ。もうすぐビワの実も黄いろくられるし、畑では麦の花も咲くのだ。風も鳴る。ねえ、子河童、お前は僕